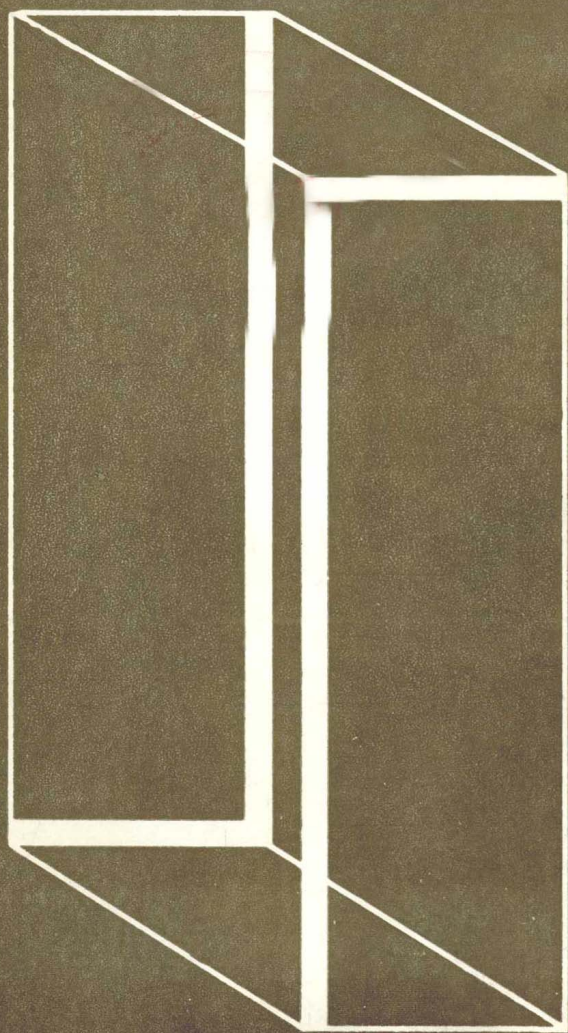


墓標
水上勉



花 の 墓 標

© 1962

著 者 水 上 勉

昭和 37 年 8 月 10 日印刷

昭和 37 年 8 月 15 日発行

発行者 宮本信太郎

印 刷 三 晃 印 刷

発行所 **中 央 公 論 社**

東京都中央区京橋2-1

電話(561)5921～9番

振替・東京34番

定価 300 円

検印廃止

花のない墓に 5

第一話 錆びた海 11

第二話 黒い首飾り 41

第三話 断橋 71

第四話 闇の記憶 104

第五話 白い鎖 132

第六話 赤い帽子 161

第七話 鼻のない顔 195

花の墓標

花のない墓に

私は旅をすることが多い。この話も旅先で聞いた話である。差しつかえがあるから、かりにP県ということにしておこう。

海に面したその県の辺鄙な断崖の村から水仙を売りにくる少女がいた。菰につつんで、水仙の束を町まで運んできて、一般家庭の正月用に売りあるいたのだそうだが、町の人びとは、この少女の訪れを毎年なつかしく思っていて、担いでくる花は一日のうちにみんな売れてしまう。少女は村の背後にある山裾で、冬の土を割って芽をふく野生の水仙を根ごとひいてきて売ったのだ。山をこえて歩いてくる遠い道のりも、もとのかからない水仙であってみれば、それで労がねぎらわれたというものである。町の人びとは少女の言い値で買い取っていた。ところが、ある正月前の一日、少女の訪れを待っていた町の人たちは、この少女が姿をみせぬことを知った。正月花の水仙を断念しなければならなくなった。と同時にかなしい噂を聞いた。この少女は山をこえてくる途中の海岸で、水死体となって発

見された。かわいそうに、水仙の花束を背負ったまま死んでいた。町へくる途中で死んだのだった。足ふみはずして海へ落ちこんで死んだのか、自ら投身したのか謎であった。警察でもいちおうしらべてみたけれど、自殺する理由は家庭環境にはなかった。ただ貧しい家だったということだけはわかった。少女は十七歳である。裏の背山の水仙をひいて、町へ売りにゆくのを毎年楽しみにしていたという。

「この女の子がね、死んだ時刻に、この海岸へ、ひょっこり現れた進駐軍の兵隊さんがいたそうですよ。ジープにのってね。……鉄砲をもって鴨撃ち^{かきうち}にきていたんだそうですよ。……」

と私に話してきかせたその人は、それだけいって口をつぐんだ。

「進駐軍兵士が何かわるいことをしたんですか」

私はきいた。

「さあ、それはわかりません。誰もみたものはないんですからね。警察だって、あのころは進駐軍にたてつくわけにはゆきませんからなア。その方は、くわしくは調べなかったそうです。真実はうやむやになってしまいましたよ」

真実はうやむやになってしまいましたよ、という言葉に、この人は語気をつよめた。

私が推理小説を書く男だからして、このような話をわざわざもち出してきたということが顔にも出ていた。が、その人はいいかげんなことをいう立場の人ではなかった。

真実はわからずじまいに終っている。そうして、ひとりの水仙売りの少女が原因不明で死に、その霊が、いまでも波荒い漁村の共同墓地の一角に眠っているのだということを、私にいいたいらしかっ

た。私はこのはなしをきいて気が重くなった。占領下に起きたはなしだ。このはなしを、その少女が死んでから五年もたってから私は耳にしている。

P 県は日本海辺の忘れられたようなところだ。私はふっと、日本全国を歩いたら、これと似たようなかたまりはなしがいくつも聞けるのではないかと思った。

敗戦の年から、昭和二十三、四年にいたる日本の混乱期に、いくたの女性が占領政策の下にあって憂き目をみたという話は人づてにもきいたし、また、私のように福井県から、東京、浦和と転々流浪した者の眼には、些細な事件ながら、いろいろと忘れがたいかなしみもふくんで思いだされることは今でも数多い。

進駐軍兵士に強盗に入られたり、暴行をうけたり、脅迫をうけたりした人びとは、当時私たちの隣近所にならずのようだった。また、私自身も、直接そうしたことを目撃したこともある。

兵士だけではなかった。軍属機関に所属して日本にきている外国人に対しても、私たちは、兵士と同じ恐れをいだいていたし、不当な処置をうけても、軍法によって泣き寝入りしなければならぬ立場にしなければならなかった。敗けたら損や、という言葉がそのままあてはまった時代である。

戦争に敗けたことによって、私たちは軍閥の崩壊を知り、新しい民主主義の時代がきて随喜した。

しかし、この役割りを果たした占領軍兵士との街角での出会いには何ともいえない複雑なものがあった。空恐ろしさで物かなしさを感じたのは私だけであろうか。主食の遅配欠配で、私は当時、東京の焼け野で餓死寸前だった。占領軍から放出された小麦粉やあんの罐詰はたしかに有難く、私は驚喜してそれを貰いにいった。しかし、私は、あの甘酸っぱい罐詰のあんずを、三日も四日もたべて生きた日

のことをかなしく思いたす。腹ふくれた今日にあって、そのことをいうのではない。私は、甘くて酸っぱいあんずで、猛烈な腹痛をおこして病人となった。驚喜してたべすぎた私がわるかったのであるう。

進駐軍兵士は平和の使者であるべきであった。しかし、この兵士たちもやはり人間であり、母国に妻や恋人を置いてきぼりにして、東洋の一小国に足をふみ入れているのだった。目についた水仙売りのかれんな少女に欲情をおぼえたとしても無理からぬことだとも思う。暴行、窃盗、詐欺、この種の事件は日夜巷に起き、新聞はこれを「大男」によって行なわれたというふうに報じた。それも三面記事のほんの目だたぬ隅に掲載されたのである。こうした記録は当時公表できなかったにしても、泣き寝入りしなければならなかった私たち同胞のかなしみは、被害者だけが秘めてしまつてよいものかと私はいつも考えながら生きてきていた。

松本清張氏の「日本の黒い霧」は占領後十五年目に発表された。占領下の国内に起きた大事件の数数を、氏一流の推理によって解きほぐしてゆくうちに、その犯人は占領という大きなどうにもならぬ壁の向うに在って、捕縛するわけにゆかないという、日本人の置かれていた立場というものを、私たちにわかり易く教えてくれた警世の書でもあった。氏のすぐれたこの業績には誰もが果さなかった勇氣と、文学者としての素直な怒りが出ていて、私は感動をおぼえたのであるが、私は正直、この書を読んだ時に、あのP県の波荒い村の共同墓地に眠っている一少女のことを思いうかべていた。

「花の墓標」は、その少女にささげられた供花だといってしまえば、それでいいつくせるようにも思えるのだが、この本には七つの女性の死がある。それは私が、旅の途中で耳にはさんだり、占領当時

の何げない新聞記事の裏に、嗅ぎあてた話に、私があえて推理してみたような話もまじっているけれども、総じて、みな私たちが隣近所で噂しあったかなしい話や三面記事を、私が再構成してみたものにほかならない。

私は「花の墓標」を『婦人公論』に連載した。その時、この小説に「推理小説」という名が冠されているのに少なからず困惑した。なるほど、推理小説に仕立てようと努めたところもある。しかし、いずれも犯人はわかっているものであった。それでは七つの死にかけられた謎はもともとないわけであって、これもまたおもしろい犯人あての推理小説には落第ということになってしまふことを知ったからである。

しかし、私はそれでもいいと思つて書きつづけた。そうして書き終えてみて、私は私なりに仕事をしたという感慨をおぼえた。私の望みはいくらか達せられたように思えたからだ。ある読者はこの七つの女性の死を読んで、どれもこれも似たようなはなしだと失望するかもしれない。それでもいいのである。似たようなはなしが日本全国の津々浦々に起きていたのだ。私はそうした草むらをかきわけてみて、あの水仙売りの少女と似た花のない墓に詣つてみたかった。そうして、私は一人一人の霊に花を捧げたのである。それではこの七つの死は実際にあったことかと読者は私に問うかもしれない。私はだまるしかない。作家というものは、終生、己れがえがいた絵空事に花を捧げる人間だからである。

私は旅が好きで、今日もまた旅に出る。汽車が名もない山間の地を走る時に、私は軀からだをせりだして窓の外をみる。名所旧跡に私は少しも興味はない。観光地も尚更のことである。私が感動をおぼえる

車窓からの眺めは、山かげにかくれた小さな墓地の群れをみる時だ。

日本の山間の村々をゆくと、塔婆の倒れかけた古い墓石の見えるこんもりとした丘がいくつも見られる。あの山かげの墓の中に、花のない墓がありはしないかと私は軀をせりだすのである。花のない墓に……。

錆びた海

I

戦時中、舞鶴海兵団のあった舞鶴市は、京都府の北部、日本海にのぞんだ与謝半島と福井県の内浦半島とのあいだにあった。港は深くえぐれた内湾に面していた。

この港が天然の要港といわれた理由は、両側の岬が高くそびえている上に、湾の入口が狭くて、二つの小島を境い目に、巴形の奥湾が分岐してかくれていたためである。

海兵団は、海軍工廠、軍需部、病院、その他の施設と併存していた。もともと、小さな漁港にすぎなかった。ところが、鎮守府の設立以来、急激な人口の膨脹をみて、附近の農村や、山地にまで軍関係の宿舎が建てられ、昭和二十年の終戦になるまで、安建築の立ちならぶ歓楽街や商店街にはいつも兵隊が充ちあふれていた。

この舞鶴市が終戦をむかえた日の動揺はすさまじいものがあった。日本海軍の崩壊は、市の崩壊を

意味したからである。動乱は他の軍都にもみられたように、あらゆる面に起きた。解体した海兵団から復員してゆく兵隊たちが、昼夜を分たず、東舞鶴駅から全国に散ってしまうと、占領軍の指令によって、旧軍隊施設はマッカーサー司令部の管理するところとなった。東舞鶴から、岬にそうて濟岸を東へ五百メートルほど入った地点にあった海兵団本部の建物は、一日にして、占領軍の占拠するところとなり、「占領軍司令部」の看板が掲げられた。

旧海軍は、蜘蛛の子を散らしたように町を捨て去ったのだが、本土決戦の様相を帯びてきていた二十年の八月まで、海兵団は糧秣や、武器彈藥等の倉庫を附近の山間部落に疎開させる必要が生じて、京都府北部ならびに、福井県若狭地方の村落の田畑に、泥縄的な軍物資の疎開倉庫建設に精を出し、徴用人夫や、応召軍人たちが汗みどろになって山野を蟻のように這いずりまわっていた。その作業をやり放しのまま放棄して去ったのだ。

H部落も、その例にもれない。青葉山の中腹にあったわずか三十戸しかないこの部落は、猫の額のような傾斜地の畑を守り、わずかな野菜類を売って生活してきた貧乏部落だったが、強制的に農地の一部を買上げられて、人家は割当てによって海兵の宿舎になった。

寺院も神社も、分教場も、徴用人夫たちの飯場と化した。兵隊たちの作業は、本土決戦にそなえて、当時「タコツボ」と称された穴を掘ることにあった。穴にもぐりこんで、上陸してくる敵兵を迎え撃つ想定のもとに司令官から指示された作業である。H部落には、三人の士官と五人の下士官が区長の家に寝起きし、三百名の応召兵の労働を指図していた。

H部落に住んでいた、猪飼又七は、なけなしの芋畑の一部を軍に献納せねばならなかった疎開者の

一人であった。猪飼又七は、当時三十歳で、たかという二十六になる妻をつれて、大阪からこの部落に疎開してきていた。又七は部落の猪飼藤左衛門の次男で、小学校を出ると、大阪に出て染物職人をしていたが、強制疎開によって立退きを余儀なくされ、兄の家をたよって部落へ帰ってきた。兄から又七はわずかな田畑を分けてもらい、薩摩芋や、陸稻をつくり、たかと二人が食べてゆけるだけの細ぼそとした百姓に返っていた。ところが、半年もたたぬまに、軍隊が入りこんできてタコツボを掘りはじめたのである。考えてみると、又七の疎開してきた場所は、軍港が一望にみ渡せる山の中腹にあった。大阪よりも空襲の危険があり、兵隊たちが眼の色をかえて、昼夜兼行でタコツボを掘っているのを見ると、失敗したと思った。しかし、又七は、この部落が、在所であったから、ほかにゆくところがなかったのである。わざわざ、危険にさらされに帰ったことになったわけだ。

「あんた」

と百姓仕事に馴れない妻のたかは、色白で、むっちりした女だったが、めっきりやせ細った顔にケンをつただよわせて言った。

「この山の下に、トンネルのような穴がいっぱいあいてて、火薬がつまってるそうどっせ。火薬庫の上に、部落の家が建つとるって兵隊はんが言うてはった。おそろしいところへ帰ってきましたな」

たかは作業隊員の一人からそんなことを聞いたらしい。又七は聞いていて、寒い気持ちがあった。

又七は小柄な貧相な軀つきをしていたが、大阪では真面目に染物商店で丁稚生活を終え、独立の日も近かった。しかし、戦争の悪化で、転業せねばならなくなり、辛抱して働いた技術も活用しないままに高射砲陣地の設営に徴用されていたのだった。その徴用期限が切れて解除になると、立退き命令

もあって、又七は郷里へ帰ったのだ。又七はたかの顔をみて言った。

「火薬庫の上ののっかっている家やかて、わしのうまれた家にまちがいがないわいな。兄やんは、精出して火薬庫の上の畑を守りしてきたンや。この家しかゆくところがあらへん。ぜいたくいうたらきりがないわな。ほんなこというたら、日本全国、どこへいっても似たようなとこばかりや」

たかは鼻をならして、夫をみていた。

二人の開墾している畑の下からは、きりたった青葉山の傾斜が海に向って落ちこんでいた。裾の方に皮をむいたように赤土の肌の出た新道がひろがっていた。海は黒く沈んでみえた。赤土の掘りおこされた凹部は、松が植えられていて、ガスタンクのような灰いろの偽装を施した火薬庫の姿がかくれてみえる。

舞鶴要塞地帯。地図の中から海軍が空白の地として削除した地帯である。青葉山には、このような小さな忘れられた部落が、いくつとなく山巒さんらんの中にかくれていたのだった。

2

八月十五日の終戦によって、前述の如く、海兵団本部は解体し、充満していた兵隊たちは十日とたたぬまに舞鶴市から姿を消したが、軍需物資の倉庫のならんでいた市の海岸地帯は、夜っぴいて、トラックが列をなしていた。被服、ミシン、鉄板、食糧、器材、薬品、それらのすべては、地方人には涎よだれのどのような品物ばかりであった。階級章のない軍服を着た一部の人びとの手によって、それらの物資が、どこへ運ばれるのか知っている者はなかった。